

シュメール語は日本語，アルタイ諸語と同系か：その2 形態・統語の比較

板橋，義三
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5338>

出版情報：言語文化論究. 5, pp.95-104, 1994-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

シュメール語は日本語、アルタイ諸語と同系か

—その2 形態・統語の比較—

板橋 義三

a. 名詞, 形容詞, 動詞の区別

§ 3 (1) 序の類似点の 6) で扱ったが, Ahlberg は日本語もシュメール語も共に名詞, 形容詞, 動詞の区別がないと主張している。しかし, 古代日本語では同じ語根から名詞, 形容詞, 動詞が作れるが, これらの区別はある。即ち, その語根それ自体が文中に占める位置によって区別されるのではなく, 各々の活用がその区別をするのである。Ahlberg は waro hito (正しくは warö Fitö) を例に取り, waro を語根と見てその直後の hito を修飾しているので waro は無変化の形容詞として機能しているという。しかし, この語の語根 waro が形容詞として機能したのではなく, むしろ名詞と名詞が結合して複合語をつくるという用法であって, 形容詞の助動詞の -ki が脱落した訳ではないのである。その証拠に hito i waro とは言えないのである。即ち, Ahlberg が挙げた他の例も含めて古代日本語では文中に占める位置によってその語の品詞や機能が決定されるのではなく, それぞれの品詞や機能がすでに決定されていて文中でその位置を占めているだけに過ぎない。

b. 名詞

名詞の形成法は日本語もシュメール語も基本的には同じであるということが出来るが, これは別に日本語とシュメール語だけに共通している点ではなく, 他の語族などでも同様

の形成法が無数にあるので, その2つの言語に系統関係があることを理論的に決定する証拠とはならない。

c. 代名詞

代名詞とその類似する品詞を Ahlberg は数多く上げているが, これらはほとんどがその意味が不明なものであり, 古代日本語に表れる一般的なその意味に相当する語についての比較は全くない。一つ一つ見て行くことにする。

S. ma を一人称単数代名詞とし, その交換形には mae/me/mē があるとしているが, 本来は ma+e [主格接辞] であったとする。しかし, そうであったとする例文が全く示されず, どのように使用されたのか分からない。古代日本語には ma「自身, 身」という語が存在したとしているが, これは結合形でのみ使用されるもので独立して使われないのである。また, これは mi の変化形であるとしているが, その理由は全く示されず, また ma それ自体の意味も明らかではないにもかかわらず, ここでは Ahlberg の主張する意味を付したあかも mi の変化形であるごとく説明している。その OJ ma が使われる語の例として maro (正しくは marö) を挙げているが, この ma がどうして一人称単数形と結び付くのか明確ではない。古代日本語の本来の一人称単数形は *na であって, それはモンゴル語の一人称単数代名詞の斜格形 na- と通じ, ま

た OJ mi も同様にツングース語やチュルク語の *min- などと共通しており、同源語であると考えられる。これらの古代日本語の一人称単数形を取り扱わずして、独立形態素ではない ma- を日本語の一人称単数形であると決めつけてしまうのはその比較が意味をもたないことを裏付けているようなものである。

さらに oma, kuma, Nma はそれぞれ順に一人称単数、一／二／三人称単数、二／三人称単数代名詞であると Ahlberg は主張するが、これらはすべて琉球語であり、古代日本語には存在しない人稱代名詞である。しかし、そのことに関しては全く触れず、古代日本語に存在したかのようにシュメール語と比較している。また、これらは本来人稱代名詞として使われているのではなく指示代名詞として使われ、それから派生して人稱代名詞としても使われるようになったのである。kuma はすべての人稱を含むとしているが、その意味は何であろうか。しかし実際はこの語は一人称単数は示さない。それは本来指示代名詞「ここ、こちら」を表すので、一人称単数を表せないのである。また Ahlberg は ma は一人称単数代名詞であると述べているので、それに従えばこれらの共通部分の -ma は一人称代名詞だと言うことになる。だが、これらの -ma は上記のように指示代名詞なのでこの語が一人称代名詞ではなくなることになる。では何かと言えば、ma 「場所、空間」である。即ち、kuma は ku 「この」+ma 「場所」と分析でき、「この場所、ここ」と言う意味であって、人稱とは全く関係がないのである。

その他に古代日本語の mana deshi の ma- が「私の」の意味ではないかと Ahlberg は言うが、2つの点で誤っている。1つは ma- は Ahlberg の考えからすれば、人稱代名詞で属格の「の」という意味はないはずである。またもう一つは ma- は本来「真」という意味の接頭辞であり強調の機能をもち、「な」がこの直後の名詞を修飾し現在の属格の「の」の機

能をすると考えられる。従って、この語の意味は「真の弟子」と言う意味である。

ma 「場所」はシュメール語でも日本語でも同じ形態、意味をもつが、その一致はシュメール語における借用か偶然の一致のどちらかであると思われる。シュメール語における借用とは日本語からの借用ではなく、セム語族や印欧語族などの近隣語族からの借用である。従って、シュメール語と日本語の間には借用関係は存在しない。これは結局偶然の一致ではないかと考えられる。即ち、これはシュメール語と日本語の間に規則的な音韻対応が存在するということではなく、ただ単にこの語が形態、音韻の両面において一致したということに過ぎない。

シュメール語の umun 「王」には munu からの短縮形 mun があるとし、それを古代日本語の mono (正しくは mönō) 「者、物」と比較しているが、この S. mun と比較できる理由として mun の n は nu に戻り、さらに nu と lu は交換形であるとする。しかし、それ以前にまずこの他の語で -n が -nu の短縮形であると裏付けできるような同じ変化を持つ語を示す必要がある。でなければ、それはあくまで仮定であってその域を脱しない。また、nu と lu は交換形だと言うが、それはシュメール語の中で一般に起こる交換なのかどうか吟味を要する。この語の場合はこの n が l と交換しない場合なのではないかと考えられ、この比較は音韻対応の法則が発見されないかぎり、無効となる。また、この対応例として古代日本語の ömönō の方言形である umun を選んだのはどのような理由からであろうか。シュメール語の対応形から判断すると、両方とも同形態であることに気づくが、多分 Ahlberg その点を述べたかったのであろう。しかし、その意味の違いからも分かるように、両者は比較不可能である。

シュメール語の一人称代名詞の主格形に ga そして属格形に gu があり、古代日本語に

も同形態の人称代名詞が存在すると Ahlberg はいうが、これは的はずれの比較だと言える。それはまず古代日本語では助詞を除いて有声阻害音が語頭にこないでこのような語は借用語でない限り存在しない。即ち、これらは中国語からの借用語であるとしか考えられない。また、これらが中国語音の音読みであることには気がつかなかったのであろうと思う。

Ahlberg はさらに za, zu の項目をあげ、前者はシュメール語の zae/ze は za '二人称単数' と日本語の sama '（誰々）様' の za/sa/sa との比較をすると共にシュメール語の za を「場所」として日本語の zarani などの 'za' が「場所」を意味するとして比較している。しかし、日本語では sa であり za は連濁であり、sama は 'sa (方向/状態の接尾辞) + ma (接尾辞)' である。この sa は本来は名詞であって、それが後に接尾辞の用法に派生したものであると思われる。また、現代語の zarani という語は後になって、生成された語であり、'zara + ni' であって、zara はそれ以上分解して分析することは不可能である。従って、この日本語の sa や za とシュメール語の za とは比較不可能である。また、zu はシュメール語では「二人称単数」であり、これと比較すべき日本語の対応語は sore/sono/so の so- (正しくは söre/sönö/sö の sö-) であるとする。しかし、残念ながら、この日本語は人称代名詞ではなく指示代名詞である。その直接の比較対応語として unzu などの zu を出しているが、この unzu などは新しい形態素であり、本来は sö であり、この zu と比較すべきではなく、形態的に対応するこの sö- と比較すべきものであった。しかし、たとえこの sö- と比較したとしても、意味の面からこの両者は同源語の蓋然性はほとんどない。

シュメール語の -ne/-ni 「こー、そー」/-ri 「あー」と日本語の -re/-ri の比較では、まずシュメール語の前者の二つ -ne/-ni は日本語の ane, ani の -ne, -ni にもしかしたら対応

するかもしれないと Ahlberg は述べているが、その可能性はほとんどないと考えていいと思う。その理由はシュメール語のそれは指示代名詞であるのに対し、それが日本語の「兄」や「姉」の形態素の一部であり、その意味も分からない -ne, -ni は少なくとも指示代名詞的な機能は全くないからである。また S.-ri は日本語の現代語形の -re や方言形の -ri と比較し、これを現代語形の are 「三人称単数」や方言形 ari 「三人称単数」や uri 「あの人」に見られるとしている。しかし、少なくとも次の三点において誤っている：(1) これらの日本語形は「三人称単数」などの人称代名詞ではなく本来は指示代名詞であり、それが現代語に見るように人称代名詞としての用法に派生したのである。(2) 方言形の -ri は -re より古い形であると Ahlberg は考えている様だが、これは全く逆で、琉球語の -ri は古代日本語の -re よりは新しい形である。(3) 指示代名詞の意味の違いは -re/-ri にあるのではなく、その前の「こー、そー、かー/あー」の部分にその意味の相違があるのであって、それをその違いを反映していない -re/-ri にあるとしたところは見当違いである。この日本語の指示代名詞の接辞 -re は位置・方向格を表すのであって、kara の ra もこの変化形と考えられ、アルタイ諸語のそれと同源語であると考えられる (板橋：1990~1991)。

Ahlberg はシュメール語では l と n は一般に交換し、lu 「人、所有者」と nu 「人、所有者」を始め、その例を数例あげており、日本語の tukurū [敬語助数詞] や tuturu 「分らず屋、のろま」の ru または ru に対応すると共に人を表す言葉であると言っている。

まず、この tukurū, tutuni が琉球語であることを全く明確にしていない。比較言語学の立場から琉球語は古代日本語とは過去のある時点で分岐したといえるので、日本語方言としては扱わない。この tukurū は古代日本語の tōkōrō であり、「場所」がその本来の意味

である。それが琉球語の特殊用法として後に敬語助数詞に発達したものである。Ahlbergはそれを全く逆にとり、敬語助数詞の用法が第一義であると取ったのは無理解によるものである。さらに、tutuniを含めて、そうであるが、琉球語形を選択したのはどんな理由からであろうか。前述のように、Ahlbergは琉球語の語形がすべて古形であると考えている節があるのが分かる。しかし、この語形より古いのがtököröである。琉球語の三母音体系は古代日本語の八母音体系より五母音体系を経てきたものだからである。ここでの問題点である-ruは意味的に「人」とは関係がないのである。例えば、現代語の「ばか」は本来の日本語ではないと思われるが、bakaのbaやkaはどちらも「人」を表してはいないが、結合した形態全体である特定の性質を持った人を表すことがあるのである。従って、tukuruにしてもtutuniにしてもそれぞれ-ruと-niの部分には「人」を表す意味などなく、語全体でもって「人」に関する性質などを表しているだけである。さらに、Ahlbergはtaru「だれ」、wanu「私」、nushi「あなた」などを挙げているが、これらもすべて琉球語であり、これらの-ruや-nuには「人」に関する意味はなく、「人」に関する本質的な意味は前者2つではtaとwaにあり、それぞれ古代日本語の疑問詞taと一人称複数waに対応するものである。また、琉球語のtaruの-ruは古代日本語のtare, kore, sore, dore (正しくはköre, söre, döre)などの-re, 古代韓国語のiri, työriの-ri, 満州語のere, tereなどの-re, 成文モンゴル語のtereの-reなどと比較でき、これらはすべて同根の接辞から派生したと考えてよいだろう。nushiはnu+shiには分解できず、nushiで1つの形態素であると考えられる。従って、日本語には-ru/-nuの交換は存在しなかったと言える。

Ahlbergは琉球語のnagara「背の高い人」、sugura「優れた人」、wara「高貴な人」などの

-raをシュメール語のmeri la「肉屋、〈ナイフ人〉ugula「職工長、監督」la bar「奴隷」のla「人」と比較しているが、琉球語の-raの意味は特殊であることをまず述べておく。即ち、古代日本語の-raは本来、方向や位置を表す接辞であり、それが「所、方」を表す名詞となり、これが琉球語ではさらに「人」を表すようになったのであって、-raそのものが人を表すのではない。事実、このraは今帰仁方言では沿格や奪格の接辞や方向を表す名詞として、八重山方言では方向を表す名詞の接辞として生産的に残存している(板橋1990: 92)。

今帰仁方言

/wa : ra/ 「上の方」

/hica : ra/ 「下の方」

/maha : ra/ 「中の方/中程度」

この用法は古代日本語と同様であり、それが第一義の意味であり、本来方向格を表す接辞であった。これは人の意味を表すようになるというのは現代日本語にも見られる「方(かた)」の意味と同じであることや本来指示代名詞であるものが人称代名詞として使われていることなどを考え合わせると、それほどこの変化は奇異なことではなく、ごく平凡な意味変化過程であると考えられる。さらに、Ahlbergの誤りは古代日本語のkora「子供」の-raを同一視して上述の-raに属させているが、これは複数、集合体を表すもので、上述の-raとは起源を異にするものである。また、ura「あなた」とあるのは古代日本語のore+a(親愛の接辞)であって(中本1985: 163)、この-raは上述のどれとも全く関係ないもので、このu+aというように分解できる結合形ではなく、uraという1つの形態素である。
* unura「あなた」も古代日本語のönöre「自身」からの派生と考えてよい。

日本語にuri「それ、その」があり、それをシュメール語のur「それ(三人称単数)、これ、それ(指示代名詞)」と比較しうるとAhl-

berg は述べているが、まず、この uri という語は古代日本語にも現代日本語にも存在しなかったものである。これは琉球語であり、本来の形態は ore「おまえ」であり、古代日本語に存在した形である。この琉球語の uri は「その、それ」の意味のほか三人称代名詞としても機能した。しかし、この人称代名詞的用法は後に発達した用法であると思われる。それは古代、現代日本語の指示代名詞から人稱代名詞への派生を考えると納得がいく。従って、これは指示代名詞ではなく、シュメール語の ur とは比較できない。

Ahlberg はシュメール語の -bi「集合接辞」と日本語の bi「集合接辞」を比較しているが、日本語には -bi という接辞はなく、もしあるとすれば、方言形であろう。もしそうだとすれば、まずその形態がその方言内で二次的に発達した形でないことを示さなければならぬ。しかし、その言及が全くない。また、シュメール語も日本語もその例文が示されていない。

シュメール語では aba「だれ」を除いて ba「三人称単数所有代名詞」は主に無生物と共に使われるのに対して、日本語の ba「目的格接辞」は無生物や生物の別に関係なく使われる。即ち、シュメール語の aba「新しいもの」、ba「目的格接辞」、aba「姉」、aba「妻、妾、女中」eneba「少女、姉」などの様に使われると Ahlberg は主張するが、シュメール語と日本語の例はどんな意味的類似があるのか判然としない。日本語の例は ba「目的格接辞」を除けば (Itabashi 1988)、三人称単数代名詞であるという以外に全く類似性は見られない。これは比較の対象とはなり得ない。

日本語の w と m は交換するという理由で waro (正しくは warö) / ware / wanu の wa- と maro (正しくは marö) / mare / manu の ma- の両形があると Ahlberg は主張するが、古代日本語の ware, maro と琉球語の wanu は存在したが、その他の waro, mare,

manu はどの方言、言語に存在したものなのか全く分からない。このようにその語の意味が不明なものや意味が全く異なるものであるにもかかわらず、日本語や琉球語の w と m が交換可能であるとする理由は何であろうか。この点が明白にされなければここでなされた比較はその効力を失うと考えてよい。また、これとの関連で日本語の na / nare / nase (意味は添付されていない) の na- がシュメール語の la と対応するかも知れないと述べているが、その理由として日本語とシュメール語の音韻対応に n:l があるということを挙げている。しかし、上述のようにその対応例もなくその信憑性に欠く。

d. 形容詞 (修飾部)

日本語にもシュメール語にも名詞、形容詞、動詞にはその区別が存在しないと Ahlberg は述べているが、しかし、前述の通り日本語にはその区別がある。また、Ahlberg はシュメール語では形容詞と言うより修飾部として扱い、文中のどの位置を占めるかによってその修飾部が決定されるという。シュメール語の基本語順は名詞+形容詞であり、時に形容詞+名詞のみである。しかし、この語順は前述したように類型論的特徴であるからこれを理由に系統関係の裏付けとすることはできない。

e. 副詞

Ahlberg はシュメール語の -(e)she と古代日本語の -shi を比較しているが、このシュメール語の語は副詞形成接辞「へ」で、日本語のそれは形容詞の形成接辞で、その意味は例えば「あらし」の -shi、即ち、方向を表す接辞「へ」に対応するのではないかと述べている。これはシュメール語の接辞の意味「へ」をあまりにも意識し過ぎた恣意的な解釈であ

り、日本語の「あらし」の-shiは本来方向を表したのではなく「風」という意味を表したものがその後特殊化し「方向」を表すようになったが、この-shiの機能も形容詞化ではなく名詞化であり、根本的に形容詞活用語尾の-shiと名詞化の-shiの機能は異なっている。従って、この2つは異なるshiであると判断できる。即ち、シュメール語の副詞接辞と日本語の形容詞活用語尾は全く関係がないのである。またAhlbergは-keshi「ようだ」を挙げているが、これはAhlbergがいうように-ke+shiに分解され、-shiは上述の形容詞活用語尾の-shiである。

シュメール語(a)bi「ように」と古代日本語-mi(連用形修飾語形成辞)と-bi(形容詞形成辞)を比較しているが、シュメール語の例文や語例がないので、比較できない。古代日本語ではbとmは交換できるが、この例では-miと-biは意味的機能的に一致するものではないと同時に-biの代用として-miが使われたという形跡は古代日本語にはない。また古代日本語にはAhlbergのいうようなmiyabiruやotonabiruという-ruのついた動詞はなく、miyabuやotonabuという形態のみであってこれらの現代日本語の形態と比較しようとするのは前述したように全く誤った比較の方法といわねばならない。さらに、otonabiruとotonaburuは同義語として扱っているが、これはそれぞれotona-biru, otona-Fur-uというように分析され、-biru「ようになる」で-Fur-u「ように振る舞う」という2つとも異なった動詞から構成されており、それが各々補助動詞的機能を果たしている。従って、これはそれに対応する古代日本語は-buと-Fur-であり、本来異なった動詞から成り立っていることが分かる。さらにこのFuri(動詞Fur-の連用形：名詞形成辞-i)「振りをする」とは派生的意味で、本来は「信仰と直接関係物を揺り動かすことによって活力を呼び起こすこと」であり、これをシュメー

ル語のhur「このように」と比較しているのがある。このhurは指示代名詞的機能であり、意味上からは全く比較不可能である。

g. 格表示

[1] 主 格

Ahlbergによると、主格は両言語とも主格接尾辞がなくてもよく、シュメール語ではeやaが使われるとしているが、その例示は全くなく、その一方日本語では方言形でa、古代日本語でiであると述べているが、これも例文がなくその用法はわからないので比較できない。

確かに古代日本語では主格はiで表記されていたが、これは成文モンゴル語のinu、満州語のinu, ini、古代トルコ語igなどと同源であると考えられる。これらのアルタイ諸語の形態は本来は三人称代名詞であり、それが接尾辞的に使用され最終的にはiのみが使用されるようになったのである(Itabashi:1993)。

[2] 対 格

シュメール語にはAhlbergが対格とみなす冠詞的接尾辞-bi/-ba/-beとそれに対応する対格を示す動詞接頭辞-b-があるとしているが、この接頭辞は無生物に言及する時に使われるものである。それに対し生物に言及する対格動詞接頭辞-n-があるが、これに対応する接尾辞は存在しないとしている。しかし、実際には三人称代名詞-ni/-na/-neが存在しこれに対応する接尾辞である。これはまさに-bi/-ba/-beが冠詞的機能を果たしているのに対応している。従って、Ahlbergの対格を示すとみている接尾辞は実は冠詞的な用法がその第一義機能であることを意味していて対格の機能は派生的なものであることが分かる。これはとりもなおさずシュメール語には-b-と-n-の接頭辞だけが対格の機能をもっていたとみてよいものである。この接頭

辞-n-に対応すると考えられる日本語の対格を示す接尾辞は存在しないので、このもう一つの接頭辞-b-も形態的には酷似しているが、日本語の対格の接尾辞とは比較できないのではないかと思う。

さらに日本語の対格接尾辞 wo (正しくは wō) を動詞に付く接頭辞ともみることができると言っているが、これは不可能である。それは副詞が動詞の直前にきた時、対格接辞は必ず名詞の直後に置かれるからである。即ち、名詞+対格接辞+副詞+動詞という統語形態をとるのである。

[3] 属 格

シュメール語の基本形は ak であるとし、その前後の環境によってそれが a, ka, ke, ge に変化し、統語的には語順が 2 通りあり、次のようになる。

- 1) 所有されるもの+所有主+属格: e+lugal+a (e=家, lugal=王)
- 2) 所有されるもの+属格+所有主: lugal+a+e

これに対し、日本語の方は wa と ga の a, そして ga の 2 つの属格があるという。しかし、日本語には a という属格は存在しないが、これは琉球語に現れるもので、本来は ga であり、g が脱落したものである。従って、Ahlberg のいう属格は本来日本語では 1 つになることになる。しかし、属格 ga は古代日本語では常に鼻音化され nga であった。さらに語順という点から考えると古代日本語では 1 通りしかなく、シュメール語の 2) に相当するものである。しかし、これは上述したようにこの語順は系統論では決め手にはならないのであるが、シュメール語の 1) に対応するのは古代日本語では統語的には許されない語順であったことを付け加えておく。Ahlberg は ga が主語も表す接辞であると述べているが、これは古代日本語の初期の段階ではもっぱら属格としてだけ使用されたのであって、

主格の機能を果たすようになるのは後の段階である。従って、この接辞の機能の比較という点から見ると、この比較は意味をもたない。

ga の用法として、Ahlberg は 'matsu (正しくは matu) ga oka (正しくは woka)' を挙げ、現代日本語では ga がカタカナで「ケ」と表記してあることへの疑問を投げかけている。これは現代日本語の表記の慣用であって古代日本語ではこのような表記は全くなされていなかったのであり、この問題は現代日本語の問題として取り扱わなければならない。この古代日本語の ga の用法については Itabashi 1991b に詳しく述べているが、これはこの話者とこの場所の親近感を表すための ga であって、この用法はこの接辞の最も基本的なものである。Ahlberg のような「ケ」との関係は全くないのである。

古代日本語には上述の nga だけが属格ではなく、nō, na, *n の 3 つの形態素が存在していたが、それぞれその使用制限があり、同じ環境で使用される時にはそれぞれ異なった意味をもっていた (Itabashi 1991b)。この形態素のうち nō だけは Ahlberg が言及しているが、ただ簡略的に説明がなされているだけであり、na, *n は Ahlberg にとっては属格を表す接辞であったとは考えられなかったようである。

属格形として sumera と shumera という語を挙げ、shu という音は中期中国語から借用されたのでそれ以前は shu という音は存在していなかったとしているが、これは確かではない。古代日本語には /ʃa, ʃi, ʃu, ʃe, ʃo/ も存在したといわれているので、それが存在しなかったという理由で Ahlberg は shu から su は派生しないと述べている理由は確証がない。また、古代日本語の sumera の ra の語源をシュメール語の歴史的地域から説明しているが、それは系統関係があるという前提でのみ行うことができるのであってこのような説明は説得力がない。

[4] 与格/方向格

シュメール語の与格・方向格は she で表されるのに対し、日本語では shi で表されると言う。この日本語の shi は hi-muka-shi (原文のまま) などに見られるとしているが、前述したように、この shi の本来の意味は「方向」ではなく「風」であってそれが派生して「方向」を表すようになったと思われる。即ち、これは例えば arashi「嵐」、nishi「西」などの shi は「風」を表しており、実際これらがある特定の方向の風を表す語として沖縄や日本本土の方言にみられ、それは古代の名残であると思われる。それが特定の方向から吹いてくるので、その方向を表す語になったと考えられるのである。hi-muka-shi の場合は shi がすでに方向の意味に変化してしまったものが使用されるようになったと考えられる。

Ahlberg はシュメール語の ra「与格/位置格」を日本語の kotira, sotira, dotira (正しくは kōtira, sōtira, dōtira) などの ra「方向格/位置格」のみと比較しているが、この形態・音韻・意味の相似は偶然の一致であろうと考えられる。その理由としては言語学の全レベルにおけるシュメール語の中の他の接辞には日本語と比較できるものがないことが挙げられる。即ち、一つの接辞だけがシュメール語と日本語に同源であるとは考えられないので、確率的にはこの接辞の両語における同源性は非常に低いと言える。

また日本語には ra のみに限らず、ほぼ同じ意味領域の接辞に ri も存在する (板橋: 1990) が、これは古代日本語では Fidari「左」、atari「辺り」、tonari「隣」などの名詞や gari などの向格接辞に化石的な形として見られるだけのものであったが、古代日本語以前はこの ri は生産的な接辞として存在していたにちがいない。アルタイ諸語にもこれらの接辞と数多く比較できる接辞が存在し、その詳細は上述の拙稿を参照されたい。この接辞に関しては Ahlberg は全く言及がない。

さらにシュメール語には方向などを表す接辞 e があり、これはある特定の動詞としか結合せず、それも無生物に関してしか言及が出来ない。この接辞は前述の接辞 she と機能的にほとんど変わらず、方向を表すことがほとんどであるので、この e は日本語の方向格接辞 he「へ」と比較可能であると言う。しかし、ここではその例証が全く欠けている。従って、このシュメール語の2つの接辞の関係は、実際は日本語では sh と h は交換可能ではないが、たとえそうであるとしても、シュメール語と日本語のその比較は可能ではない。

[5] 類似格

この格の接尾辞の比較は意味や音声の点において完全なる程のものであると述べているが、果たしてそうであろうか。日本語の ge「げ」は本来日本語ではなく中国語からの借用「気:き」であると考えられる。この「気」が文中の時だけではなく文頭にきた時でも有声化するようになり、また「類似」や「伝聞」を表すようになると共に「へ」のように接辞のような使い方もされるようになるが、Ahlberg はまず「伝聞」の用法に全く言及せず、「類似」の用法だけを取り上げ、この「げ」には「伝聞」の用法がないかのような誤りを犯している。しかし、本来の問題はそれではなくこの「げ」が「気」に溯り、本来、借用であるということである。それはとりもなおさずこの比較が成立しないことを意味している。さらにシュメール語の例が全く示されず、その意味さえも記されていない。

また、日本語 na「な」とシュメール語の na に関して、シュメール語の例は全く示されず、ただその語が挙げられ、比較されているに等しい。

[6] 共同格

シュメール語の da/de はその機能のほとんどが「と一緒に、と共に」という意味の共

同格であるとしている。その前者は名詞の da 「側」からの発達形とみており、それが接尾辞と言う機能を持つに至り、「ある側のそばに」という意味からの派生だと言う。しかし、その例証が見られないばかりか、その機能に關しても言及していない。

これに対応する日本語の語は te (孤立形) / -ta (接続形) 「側」であると言う。これは次のような語に表れるという：

1. kanata 「向こう (側)」
2. sonata 「そこ、あなた」(正しくは sōnata)
3. anata 「あなた」
4. hata 「側, 端」(正しくは Fata)
5. kawabata 「川の縁」
6. muta/mita 「と共に」
7. to (接尾辞) 「と共に」(正しくは tö)

上例の 6 と 7 に対応するシュメール語に muda, bida, da/de をそれぞれ挙げているが、これに対応する日本語はそのシュメール語の反映形であるとしている。しかし、次の項で見ると日本語の -ta は -tu, -ti, -du, -da の交換形であり、本来名詞ではなく接尾辞であり、それが後に化石化したものと考えられるから、シュメール語との関係は全くないといわねばならない。

アルタイ諸語にも日本語のこれらの接尾辞に対応する接尾辞が存在するが、それらはすべて本来接尾辞であり名詞から派生したものではない。一般にアルタイ諸語の接尾辞には名詞から派生した接尾辞は非常に数が少ないのが特徴であり、その点から考えてもこの接尾辞は名詞からの派生とは考えにくい。従って、これから出せる結論はシュメール語とのこの語に關しての同源性は否定的である。

[7] 鞆格/具格

シュメール語の ta/da 「から (時間, 空間), 以降」は名詞に接尾するだけでなく動詞にも接尾し、「後, 時」の意味を表すが、次の

例を挙げている：

1. e gu da 「私の家から」
2. e a ni ta 「彼の家から」
3. mu shu suen lugal ta 「その年から
シュスエンが王になった」
4. iti dumuzi ta 「デュムジの月から」

これらの語は意味的には古代日本語の「より, から」に近く、一般に位置格とみられる「つ」とは異なるだけでなく、その統語的にも異なり。即ち、下記の例文が示すように古代日本語の「つ」は位置を示す格接尾辞であり、それは例文から明らかであり、「から」のように解釈できるのは方向性をもつ名詞がその後に来たときだけであり、その場合でさえもその起点を表す位置格として考えることができる。また例文 4 のように古代

1. niFa-tu-töri : 庭つ鳥「にわとり」
2. umi-tu-di : 海つ路「海路」
3. ama-tu-kaze : 天つ風「天にある風」
または「天からの風」
4. töFö-tu-bitö : 遠つ人「遠くに住んでいる人」

日本語には一般に起こらない形態、即ち、töFö-「遠い」という形容詞が名詞となりそれを「つ」が hito と結合している形態が見られる(この形容詞と同じものに tikasi「近い」がある)。これは一般にアルタイ諸語の特徴でもあるが、名詞と形容詞の違いは統語的に決定され形態的には同じであるという特徴がそのまま残存したものではないかと思えることができる。従って、この場合も他の例文の「つ」の用法と変わりはなく位置格の機能をもっていると考える。

シュメール語では「N+N+ta/da」の語順であるが、古代日本語では「N+tu+N」であり、「の」や「が」の語順と同じになっている。これはシュメール語にしても日本語にしてもその接尾辞がもつ特徴であるため、なかなか歴史的に変化しにくいもののようにみえる。そのため、シュメール語の語順が日本語

の語順に変化したとは考えにくい。従って、シュメール語の ta/da は日本語の tu との同源性はないであろう。

ここで古代日本語の tu は化石化した ti, du, da と直接的な関係があったことを述べておく。いくつかの例を示すと下記ようになる。

1. kōtira 「こちら」
2. sōtira 「そちら」
3. atira 「あちら」
4. dōtira 「どちら」
5. iduku 「いづこ」
6. idure 「いづれ」
7. iduFe 「どの辺」
8. iduti 「どのように」
9. kudamönö 「くだもの」
10. kedamönö 「けだもの」

これらのすべてが「つ」と同じ語順となり、さらにどれも位置を表す接尾辞であると言える。これらの接尾辞は本来形態が異なっていたと同時にそれぞれが共有していた機能はあったにしても本来共有しない機能を備えていたものと考えられ、それが後にその異なった機能が次第に共有した機能の拡大により失われるようになったのではないかと思われる。さらにこれらの接尾辞は「つ」の勢力拡大に伴い使用されなくなり、最終的に化石化してしまったのではないだろうか。

Ahlberg はこの接尾辞との関係で日：

シュ=y:d の対応関係があると認めると、シュda と日 yu/yo (正しくは yō) との同源性があるかもしれないとし、ことにシュメール語に du という対応形があればなおさらであると述べている。しかし、これはあくまでも推測の域を脱しないことは言うまでもないことであるが、この接尾辞も重要なので、他の接尾辞と同様、別個に説明を必要としているのにもかかわらず、全くそれがなされていない。

さらにシュメール語には3人称単数を表す ni と具格を表す ta とが結合して nita になり、機能としては位置を表す接尾辞的機能を有するようになったと述べている。また Miller の復元形 * nita を引き合いに出しシュメール語の形態の正当性を強調し、このシュメール語の結合形を日本語の「にて」と比較している。しかし、この結合形はいくら形態的に似ているとは言え、不可能である。何故ならば、それぞれの接尾辞の機能が全く異なるからであり、いくら結合形の機能が似ていようともそれは偶然の一致に過ぎないからである。

またシュメール語の位置格 a/e を古代日本語の位置格 he (正しくは Fe) と比較しているが、古代日本語の位置格は本来は位置を表す名詞「辺、あたり」であり、位置格ではなかったと考えられるので、この比較は成立しないと考えてよい。

(その3に続く)